

# 生活科

山岸 朋子

## 1 生活科における知識創造とは

実感から生まれる  
気づき

生活科の学習は、「ひと」「もの」「こと」とかかわる活動や体験が基盤となる。探検する、調べる、つくる、育てる、技に挑戦するなど「ひと」「もの」「こと」とかかわる活動や体験は、子どもが楽しく夢中になって取り組めるものである。しかし、子どもが夢中になって対象とかかわるだけでは、活動や体験を楽しむことに留まってしまう場合も多い。活動や体験をすること自体を目的とするのではなく、自分なりの思いや願いをもって「ひと」「もの」「こと」とのかかわりを楽しむことを通して、それら対象の本質を実感し、気づきを生み出していくことを大切にしなければならない。そして、その実感から生み出された気づきを直接及び間接的に交流し、紹介し合ったり、比べて考えたりすることで、自分の気づきを再確認し、さらに新たな気づきを生み出していくことができる。と考える。

生活の中で生きる  
気づき

また、学習の中で生まれた気づきを「わかった」「できた」で終わらせるのではなく、生活の中で試してみる、応用してみる、継続していくなど、自分の生活に生かしていこうとすることが必要である。そうすることで、それぞれの気づきが生活と結びつき、生きて働く知恵となっていく。と考える。

生活科における  
知識創造の定義

これら一連の営みを生活科における知識創造ととらえる。そこで、生活科における知識創造を以下のように定義する。

自分なりの思いや願いをもって「ひと」「もの」「こと」とかかわる活動や体験を通して 「ひと」「もの」「こと」に対する実感を伴った気づきを生み出し  
その気づきを自分なりに工夫しながら生活に生かしていこうとする営み

## 2 生活科における「かかわり」の活性化とは

友達への積極的な  
働きかけ

生活科では、「かかわり」の活性化を、自分の願いを実現するために、積極的に友達に働きかけながら活動する中で、新たな気づきを生み出していこうとする状態ととらえる。

## 3 「かかわり」を活性化するために

生活科における  
「かかわり」の意味

自分一人で夢中になって活動していても、自分なりに活動や体験を楽しみ、自分なりの気づきを生み出すことはできる。ただ、その気づきは限定的なものとなり、広がりが期待できない。友達とかかわりながら学習を進めていくことは、自分の気づきをより明確にし、新たな気づきを生み出していく上で欠かせない。

友達と一緒に活動し、友達の活動の様子を見たり、話を聞いたり、友達に方法を尋ねたりする中で、自分の気づきと友達の気づきを比べて考える機会が生まれる。その中で、自分の「ひと」「もの」「こと」のとらえ方と友達のとらえ方を比較し、同異を知るであろう。それらの繰り返しによって、「ひと」「もの」「こと」に対する視野が広がっていく。と考える。友達と一緒に活動する中で、「一人で活動しても楽しいが、友達と一緒に活動すると、はじめて分かることがあったり、いろいろなことに気づいたり、できなかったことができるようになったりするからもっと楽しい」という「かかわり」のよさを実感する経験を積むことが、知識創造を促していく上で大切になってくるのである。そこで、生活科における「かかわり」を活性化するための手だてを、以下の五つの観点で述べていく。

### (1) 「かかわり」の必要感をもたせる

必要感のある  
「かかわり」

「ひと」「もの」「こと」とかかわりながら活動する中で、対象と自分との間に自分なりの願いが生まれてくる。その自分の願いを実現したいという強い思いをもち、それを実現しようと試みる時、子どもは、友達がどのように取り組んでいるかを見てみたくなったり、やり方や考え方を尋ねてみたくなったり、詳しく聞きたくなったり、教えてもらいたくなったりするであろう。つまり、子どもが目的意識をしっかりともち、友達とかかわりたいという必要感を伴いながら活動に取り組むことで、新しい気づきが生み出されるのである。

必要感を生む  
素材や課題の設定

子どもに必要感をもたせるためには、まず子ども自身が「ひと」「もの」「こと」と十分に向き合い、自分の思いや願いを具体的にもつことができるような素材を吟味し、課題を設定することが必要であると考ええる。

### (2) 体の様々な感覚を磨かせる

体の様々な感覚を  
使った実感

生活経験が少ない1、2年生の子どもにとって、対象を様々な面からとらえることは難しい。そこで、「ひと」「もの」「こと」とかかわる活動や体験の中で、視覚、触覚、聴覚、嗅覚、味覚など、体の様々な感覚を働かせ実感する経験を取り入れていく。その際、体の様々な感覚を意識して「ひと」「もの」「こと」とかかわることができるように、ワークシートや板書などを工夫することで、体の様々な感覚を使うよさに気づかせていきたい。体の様々な感覚を使うよさを知り日常的に使っていくことで、子どもが元々もっていた感覚がさらに磨かれていく。それぞれの子どもが豊かに感じるようになるれば、友達の活動の様子を見たり考えを聞いたりした時に、それらも具体的にイメージしながら受け止めることができると考える。

### (3) 共通体験と選択活動を組み合わせて設定する

共通体験

クラス全体で共通体験する機会をもち、活動の中から生まれる気づきや思いが、友達と同じであったり、異なっていたりすることを経験させる。同じ素材の中からも様々な気づきや思いが生まれることを実感させることで、多様な見方や考え方を知る機会としていきたい。それらの経験を積み重ねることで、選択して取り組む活動の場合であっても、自分が経験していない活動についての友達の気づきを、自分の気づきと比べてとらえたり、想像したりすることができるようになると思える。

選択活動

### (4) 追体験により友達の気づきを実感させる

気づきの追体験

友達の気づきをさらに実感を伴ってとらえることができるよう、体の様々な感覚を使いながら追体験する活動を設定していく。友達の気づいたことについて、実際に自分の目で見ると、触れるなど、体の様々な感覚を使って確かめることで、友達の気づきを実感することができるであろう。また、友達の活動の様子を見て気づいたことや友達からアドバイスをしてもらったことなどを、追体験の場で試してみることで、自分の願いの実現をめざすこともできると考える。

### (5) 気づきの表出方法を工夫する

気づきの表出方法

単元に応じてワークシートや学習のまとめ方などに変化をつける。気づきを模造紙に書き入れてまとめる、画用紙にペアでまとめる、自分の考えを自分でまとめたものを紹介する、クイズや遊びを取り入れるなど、気づきを表出させる方法を単元

